

[巻頭随想]

日本ブドウ・ワイン学会甲府大会に寄せて

高梨 宏樹（メルシャン株式会社 専務執行役員）

この度、日本ブドウ・ワイン学会2013年度大会が山梨大学での開催に決まり、私が実行委員長をお引受けすることになり誠に光栄に存じます。ここ数年の日本におけるワイン市場は、他の酒類が伸び悩んでいる中、堅調に成長を続けております。様々な統計データにもありますが、ワイン消費は、2012年に34万KLを超え、2015年には36万KLにも届く（年間一人当たり平均消費量が3Lに達する）と見込まれています。また、日本で栽培されたブドウを用いた「日本ワイン」についても同様の成長が認められ、90万ケース（750 mL×12本換算）を超える勢いであり、今後も右肩上がりの成長が続くものと確信しております。

このように多くの日本ワインが市場で受け入れられている背景には、日本ワインの品質の向上が挙げられます。特に、近年、日本固有の品種である「甲州」を用いた甲州ワインの品質向上は目覚ましいものがあり、弊社においても微力ではありますが、甲州ブドウおよびワインの品質向上に向けたプロジェクトを2000年より開始しています。また、甲州ブドウの国際的な品種登録への取り組みでは、酒類総合研究所が中心となり *l'Organisation internationale de la vigne et du vin*（O.I.V.）への登録が2010年に完了し、日本固有のブドウ品種がワイン醸造用品種として初めて世界で認められたとともに、「Koshu」と記載してEUへの輸出も可能となりました。これに続き、2013年には日本で交雑されたマスカット・ベリーAもO.I.V.への登録が決まり、これにより日本ワインを代表する白、赤それぞれのブドウ品種が国際的な地位を獲得したことになります。

21世紀の日本の成長戦略には医療と共に農業も重要な政策の一つに挙げられています。現在の日本の農業は、高齢化などによる後継者問題があり、「良いワインは良いブドウから」という基本理念を鑑みますと、

農業の延長であるブドウ栽培およびワイン醸造も例外ではありませんが、一方でワイン造りに情熱を持った若い方々が、海外での研修を終え、日本でのワイン造りにチャレンジしていることも最近ではよく耳にします。

弊社としましても、日本ブドウの安定供給を目的として新たに展開した椀子（マリコ）ヴィンヤード（上田市丸子地区陣場台地、約21 ha）が、昨年開園10周年を迎えました。この地は、土壌分析、年間の日照時間および降雨量などを検討した結果、世界水準の高品質なブドウ栽培地として適している可能性が高いことが明らかとなり、地元区長、町議会議員、農業委員などを中心に土地利用研究会を組織し、延べ100人を超える方々と共に土地造成から進めてきたものです。お蔭様で、椀子（マリコ）ヴィンヤードのワインは、国内外のコンクールを始め、多くのお客様から高い評価を得るまでになりました。2013年6月には、上田市丸子地区の陣場台地研究委員会（堀内汀会長・約45人）が、全国農業会議所会長特別賞を受賞されたのは誠に嬉しい限りです。弊社としても、これからの日本あるいは日本人のあり方を考えながら、地域ごとのブドウ栽培、日本ワインの成長、ひいては日本の農業の成長に、日本ブドウ・ワイン学会の皆様と共に少しでも貢献できましたらと思う次第です。

日本ブドウ・ワイン学会は、1984年に設立され、これまでにブドウ栽培とワイン醸造並びにこれらに関連した分野の研究と技術の発展を目指して活動してきたことで、「日本ワイン」の品質向上に大きく貢献して参りました。グローバル化が進む中、今後は、世界における「日本ワイン」の立ち位置、すなわち「日本ワイン」のアイデンティティーの確立に、研究および技術的な側面からの更なる貢献を期待したいと思います。

